

# 仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第十六号



仙台駅近くの地下道

文学のある風景

## スプレー

地下道の階段を、恐る恐る降りていく。春はそこに、いた。

……壁を睨む横顔には、画家の集中力が漲っていた。……私は反対側の壁に背中をつけて、春の描いている絵を見た。

はっとして、息を呑む。

円が描かれていた。球体と言ったほうが近いだろうか。光沢やグラデーションが不思議な立体感を作り、その球体がいくつも並んでいる。大きさは様々で、微妙に重なりあい、全体がさらに巨大な円形を形作っている。スプレーでこれほど綺麗な円を描けること自体が、私には驚きだった。光沢のあるその球体は明らかに無機物をイメージしているはずだが、その集合体は、どこか生き物にも見える。

春の動きは素早かった。一瞬も休むことなく作業を続けている。手に持ったスプレー缶を軽快に振る。からからとリズムを取るような音が鳴る。噴射口を壁に向けたかと思うと、腕を大胆に動かす。色が壁にじわっと定着する。缶を地面に置くと、ほとんど下を見ずに別のスプレーをつかみ、振る。からからと鳴らし、また、壁に噴射する。立つ位置を変える。腰をかがめ、下部に色をつける。手首が柔らかに動いている。

（伊坂幸太郎『重力ピエロ』より）



『重力ピエロ』  
伊坂幸太郎  
(新潮文庫 2006年)

# つながる、ひろがる、言葉と本

仙台文学館が開館したのは一九九九年三月二十八日のこと。以来十年間、文学館のさまざまなイベントでは、第一線で活躍する方々をゲストにお迎えしてきました。今回はこれまでの講演のなかから、「言葉のプロフェッショナル」による、楽しく刺激的なお話を厳選してご紹介いたします。

とよたかずひこ（絵本作家）が語る

「絵本づくりと、小津安二郎」

どうしても私たち絵描きというのはサービス精神があつて、場面をコマ割りで見せたがる傾向が往々にしてあります。ところが、子どもというのはわりと想像力が豊かで、あんまり言葉の説明をしなくても、時間の経過みたいなものは予想してくれるんですね。ひとつひとつのシーンで説明するのではなくて、同じ風景でその動きを想像させる作業——たとえば、小津安二郎映画のように定点でカメラの長回しをして、余韻みたいなものを残していく——そんな絵本づくりをしています。（講演「こころのたぐひ」より 二〇〇〇年七月三十日）

とよたさんの絵本「おにぎりくんがね〜」（2008年 童心社）



高橋源一郎（作家）が語る

「三浦雅士『青春の終焉』」

三浦雅士さんの青春論が非常におもしろいと思ったのは、ぼくも同じことを考えていたからです。極端なことを言いますと、三浦さんは「文学がだめになったのは、青春がなくなったからだ」とすごい断定をしたんですね。

明治二十年ぐらいに日本近代文学ができたとき、そのころ文学というのは簡単にいうと「青春」を書くことでした。エリートたちが大学に入って愛や政治や文学に悩む。全部それです。この「青春」がいちばん大事という風潮はほぼ一九七〇年くらいまで続いていた。それが八十年代になるとビタリとなくなる。これは非常に劇的なことです。実はこれが日本文学の「盛」から「衰」へのターニングポイントであり、キーワードですね。

（講演「日本文学盛衰史」より 二〇〇二年三月二日）

## 高橋源一郎

講演会

「日本文学盛衰史」

近作「日本文学盛衰史」を中心に、文学の未来を語ります。

日時 3月2日(土) 午後2時〜  
会場 仙台文学館講義室  
定員 200名



高橋源一郎（たかはし・げんいちろう）1951年広島県生まれ。作家。著作に『官能小説家』『ミヤザワケンジ・グレート・ヒッツ』『大人にはわからない日本文学史』など。

井上和男編『小津安二郎全集』1903〜1963 映画監督。代表作に『晩春』『麦秋』『東京物語』など。現在でもその作品は国際的に高く評価されている。



小津安二郎（おつやすじろう）1903〜1963 映画監督。代表作に『晩春』『麦秋』『東京物語』など。現在でもその作品は国際的に高く評価されている。



とよたかずひこ 1947年仙台市生まれ。絵本作家。作品に「ぼくはやっぱりとりなんだ」「でんしゃにのって」「バルボンさん」シリーズ、「ももんちゃん」シリーズなど。

清水真砂子（児童文学者・翻訳家）が語る

『ゲド戦記』のテナー、そして、吉野せい

『ゲド戦記』に登場するテナーという女性はいったんは男の論理的、知的な世界に入っていくんだけど、どうもそれだけでは何か欠けているんじゃないかというので、もう一度女の暮らしを全部引き受けて、暮らしを通して言葉を考えてという女性です。

そういう女性がどんな日本語を話すのかというのが、私にとっては『ゲド戦記』第四巻を訳すときに一番大きな問題でした。それで、いろんな作家の文体を思い浮かべました。たとえば森崎和江さん。でも森崎さんは、ちょっと知の方に傾くかな。それから石牟礼道子さんのことも考えたのですが、もう少し霊的なものに傾くかな、とかいろいろ考えて、行き着いたのが吉野せいさんでした。ご本人にお会いしたことはありませんが、『涙をたらした神』に出会ったときの衝撃は大変大きなもので、今でも大事な本の二冊です。ですから、テナーの言葉は私が想像する吉野せいさんの言葉なんです。（講演「『ゲド戦記』の読み方」より 二〇〇六年九月九日）



ル＝グウィン作 清水真砂子訳『ゲド戦記』（1976〜2004年 岩波書店）

吉野せい『涙をたらした神』（1975年 彌生書房）随筆家・串田孫一が「狂いのない切れ味」と評した文体で綴られる作品集。

吉野せい（よし・せい）1899〜1977 作家。詩人の夫・三野混沌とともに開墾生活に従事するが、70年に夫が没した後、本格的に作品を執筆、発表した。



## 栗津則雄（評論家）が語る「草野心平という詩人」

草野心平という人は本当におもしろい人でした。草野さんの晩年ですけれども、あるとき、朝の八時頃に電話がかかってきて、「栗津君、君ねえ、ゴーギャンの赤ね、あれ、君、悲しみの色だね。いきなりですよ。こちらはやっと目が覚めたばかりなんだけれど、それというの、僕はその前にゴーギャンの画集の解説を書いてた。それを草野さんにあげたんですよ。それを前の晩に読んで、「わかった！ ゴーギャンの赤は悲しみの色だ！」って発見して、「これを栗津に知らせる！」と。夜中だから周りが制止するんだけど、一晩中寝ないで待って電話をかけてきた。——こういう人はいいね。こういう人に会っちゃったということは僕にとって決定的で、生きている甲斐があったという気がしますよ。

（講演「草野心平の人と作品」より 二〇〇八年十月十九日）

詩人の生活と創作の渦中に入りこむような感覚を味わえます。



『草野心平日記』全7巻（2005〜2006年 思潮社）



写真提供／いわき市立草野心平記念文学館

刊行が完結した『栗津則雄著作集』全7巻（2006〜2009年 思潮社）

草野心平（くさの・しんぺい）1903〜1988 詩人。詩集に『第百階級』『定本蛙』など。長年、仙台の詩賞「晩翠賞」の選考委員を務めた。



栗津則雄（あわづ・のりお）1927年愛知県生まれ。評論家・仏文学者。いわき市立草野心平記念文学館館長。著作に『正岡子規』『栗津則雄著作集』全7巻ほか。

ブックレット販売中！

ここでご紹介した高橋源一郎さんのお話のほか、11本の講演・イベントが「仙台文学館ブックレット」シリーズとして刊行されています。お求めは当館受付で！

# 「吉里吉里国」

## お出んせ

「井上ひさし展」ガイド

開館10周年を記念する「井上ひさし展」吉里吉里国再発見が、3月28日(土)にオープンしました。この展示は、初代館長を務めた作家・劇作家、井上ひさしの代表作『吉里吉里人』を軸に、「愉快で深い」井上ワールドの再発見を試みようというものです。

今回、展示室は「吉里吉里国」。お客様には「旅券」(観覧券)を持って「入国」し、国内を周遊していただきます。その見どころ、ちよつとだけご案内します。

吉里吉里国立劇場をイメージした小さなステージがお目見え。舞台はまさに井上ひさしの言葉が生命を得る現場。会期中にここで披露される井上作品をご堪能あれ。



何事もおらかな吉里吉里国。その国立劇場の実態は？—— 答えは展示室で。

吉里吉里国国政の中枢は、なんと国中を循環する乗り合いバス。行政、立法、司法に関わる諸々は、車内で行われる「愚人会議」において審議、採決されます。相談事のある国民は、このバスに飛び乗れば万事OK!

井上ひさしが関心を寄せる「憲法」「国家」といったテーマを俯瞰。

井上ひさし自筆「吉里吉里国地図」(神奈川近代文学館蔵)

会期中、この地図の複製を限定販売します



こちらの空間では、『吉里吉里人』関連の資料を展示します。生の資料から伝わってくる、作家の息づかい、創作の手触りを感じてください。

おもな展示資料……井上ひさし自筆『吉里吉里人』原稿、画家・安野光雅氏による『吉里吉里人』カバー絵原画、井上ひさし自筆「吉里吉里国地図」ほか

吉里吉里人

3階企画展示室

「オボリを見て死ぬ。そして吉里吉里国立病院で診てもらって死ぬ。」by 石油輸出国の大金持ち

吉里吉里国が誇る最先端医療の最前線。世界トップレベルの医師が最高の技術で治療にあたっており、長寿を望む大金持ちの憧れの的。奇想天外な医療技術には目をみはります!

井上作品が扱う「言語」「文学」「作家」とは……?

吉里吉里国立食堂購買部。店内には、吉里吉里語訳の日本文学全集(夏目漱石『坊っちゃん』、太宰治『斜陽』など)が並んでいます。吉里吉里語を完全マスターしたい方には、自修テキスト『吉里吉里語四時間、吉日・日吉辞典つき』がオススメ。

「吉里吉里国立駅」の看板がお出迎え。「旅券」を提示して「入国」したら、まずは吉里吉里国の国旗や国歌に(恥ずかしがらずに)親しみましょう。言語を吉里吉里語に切り換えられるとなお可。これであなとも吉里吉里人の仲間入り!



井上ひさし(撮影/佐々木隆二)



『吉里吉里人』1981年8月新潮社刊 装幀/安野光雅

展示室ではこのような内容が立体的に展開されています。楽しみ方、感じ方は自由! ……みなさん、「吉里吉里国マ、どんぞお出んせ〜」。

開館10周年記念特別展「井上ひさし展〜吉里吉里国再発見」

【会期】3月28日(土)〜7月5日(日)(月曜、休日の翌日、第4木曜日は休館)

【観覧料】一般700円、高校生400円、小・中学生200円

### 予告

こまつ座「兄おとうと」(井上ひさし作) 上演決定!

9月26日(土)、27日(日)

仙台市青年文化センターシアターホール

兄は「民本主義」を唱える吉野作造。弟は有能な高級官僚。宮城県古川出身の二人の兄弟と「国家」をめぐる物語。ゆかりの地・宮城での上演は必見です!



「兄おとうと」2003年10月 新潮社刊

仙台文学館ゼミナール2009のご案内

ご好評をいただいている「仙台文学館ゼミナール」。2009年度も多彩なテーマ、講師陣による講座を予定しています(内容は変更になる場合があります。詳しくは4月中旬頃から配布予定のチラシ、ホームページ、仙台市政だより等をご覧ください)。

#### 近代文学を読み解くコース

「宮沢賢治〜『銀河鉄道の夜』を読む」全3回

講師：佐藤通雅(歌人・評論家)

「『女三人のシベリア鉄道』を読む」全4回

講師：森まゆみ(作家)

#### 現代文学を探究するコース

「佐伯一麦と読む現代の文学」全3回

講師：佐伯一麦(作家)

「池上冬樹の書評講座」全5回

講師：池上冬樹(評論家)

#### 日本の古典に親しむコース

「日本の神話を読む」全5回

講師：犬飼公之(宮城学院女子大学教授)

「『平家物語』を読む」全5回

講師：佐倉由泰(東北大学准教授)

#### 表現をみがくコース

「俳句講座」全5回

講師：高野ムツオ(「小熊座」主宰)

「朗読ワークショップ」全5回

講師：渡辺祥子(フリーアナウンサー)

「川柳講座」全5回

総合指導：栗石隆子(「川柳宮城野」主幹)

# 瀬名秀明 小説『虹の天象儀』創作まで

田中朋子（仙台文学館学芸員）

昨年十月一日の常設展示室リニューアルに際し、仙台文学館では作家・瀬名秀明氏から多くの資料をお預かりした。その中で、今回は特に『虹の天象儀』の創作過程を示す資料をたどってみたい。

『虹の天象儀』は、祥伝社文庫の「SF特別書下ろし」のシリーズとして平成十三年に刊行された。物語は昭和三十三年に東京の渋谷駅前にオープンした天文博物館「五島プラネタリウム」が四十四年の営業を終えて閉館した後に起こった不思議な事件を中心に展開する。博物館が閉館した次の日、解説員だった主人公の前に突然謎の少年が現れる。少年の出現により主人公はタイムスリップし、空襲で焼失した東日天文館や作家・織田作之助のもとを訪ねる。時空を超える旅の中



『虹の天象儀』祥伝社文庫（平成13年）

で、やがて謎が解かれていく。『虹の天象儀』は、プラネタリウムでの放映を前提として創作された作品であり、小説の後には、放映のためのシナリオ制作へと移行した。今回は小説『虹の天象儀』の完成までに限定して、その過程の資料をたどりながらまとめてみたい。

## 綿密な取材

『虹の天象儀』の資料は、作品名が付けられた一つのファイルボックスにまとめられている。内容は以下の通りである。

- クリアーブックファイル（富士正晴著「私の織田作之助像」コピー、「月光の虹」新聞記事切り抜き、推敲原稿など）二冊
- クリアーファイル（『虹の天象儀』の創作メモ（レポート用紙十九枚、マニラ及びシンドニーの星座四枚、五藤光学研究所からのFAX送信表、元・天文館解説員の村松修氏及び「サンデー毎日」ライター山内宏泰氏からのメールを打出したものなど）二冊
- 村松修氏撮影「ガラス玉の中の宇宙」（恒星投影機内）写真一枚

- 祥伝社文庫編集者・加藤淳氏より「毎日新聞フォトバンク」からの昭和十八年十月及び昭和二十一年十二月写真四十枚
- 月刊天文ガイド 十一月号別冊 子供の科学（二〇〇二年十一月 誠文堂新光社）一冊
- 月刊星ナビ（二〇〇二年三月〜五月号（二〇〇一年三月〜五月アストロアーツ）各冊
- 五島プラネタリウム44年のあゆみ（二〇〇二年四月（財）天文博物館五島プラネタリウム）一冊

作者は「天文博物館五島プラネタリウム」及び「カル・ツァイスIV型プラネタリウム投影機」について、学芸課に所属し解説員として二十七年間勤務していた村松修氏に、綿密な取材を行い、五島プラネタリウムの閉館後の扉の状況（扉か、シャッターか）、窓口の位置、扉（またはシャッター）を内側から開ける時の方法、天文観測をする時に屋上に上る方法（階段か、エレベーターか）など細部に

この村松氏からの次のメールが興味深い。「A時間からB時間への移動は、星空のなかの太陽の位置を変化させて表現します。……日付ごとの太陽の位置は正確に計算されています。この動きを制御するのが年周モーターです。このスイッチをプラス側にまわすと未来へ、マイナス側なら過去へもどります。……タイムマシンに乗った気分です。……年号カウンターを投影すると西暦年数を直接知ることができます。」「プラネタリウム」は「タイムマシン」との構想が、この説明により作者の中で明確になったのではないだろうか。

このメールを打ち出した用紙には、作者の赤いボールペンでメモ書きがなされている。「私は年周モーターのスイッチをプラス側にまわした。太陽系や赤道を投影させ、併せて年号のめもりをうつした。さらに年号カウンターも。惑星たちがなめらかに天部をうごきはじめる。太陽は赤道にそって東へとながれ、金星や水星がそのまわりで

## 十九枚の創作メモ

十九枚のレポート用紙は、大別すると以下のように分けられる。

- 「月光の虹」やカル・ツァイス社のプラネタリウム投影機、五島プラネタリウムなどについての記述（五枚）
- 織田作之助に関する年譜的事項や作品についての記述（二枚）
- 昭和十八年から二十一年にかけての東京の街の様子、第二次世界大戦中に東京を襲った空

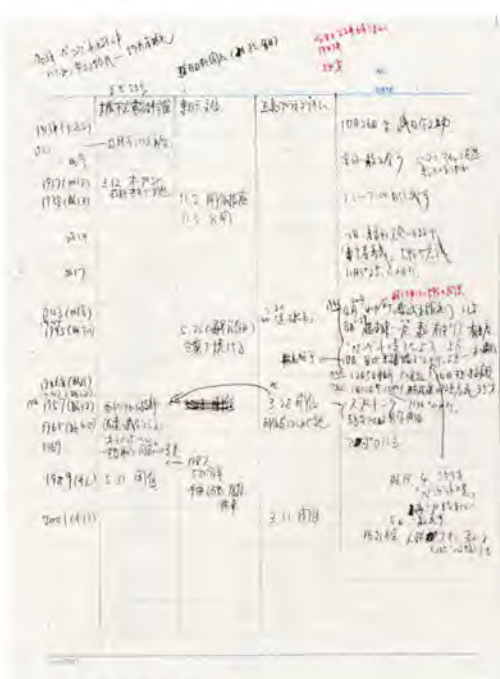
襲とそれによる被害、東日天文館が空襲によって被害を受けたときの状況など歴史的事項についての記述（二枚）

- 大正二年〜平成十三年までの年表（大阪市立電気科学館・東日天文館五島プラネタリウム・織田作之助の項目に分けられている）（二枚）
- 五島プラネタリウムの閉館と少年の登場、妻とのやり取りなど、主に作品冒頭部の構想やストーリー展開について書かれているメモ（六枚）
- 一回目にタイムスリップした昭和十八年について書かれている用紙（三枚）

織田作之助に関するメモは、一枚目上部に「思いが残る」と記され、二枚にわたって、織田の年譜的事実や、その作品「わが町」の上演について、病状の

進行などについて、克明な記述が続く。「思いが残る」とは、織田が病室で最後に呟いた言葉である。「虹の天象儀」では、この「思いが残る」のほかに、織田が見たという「月光の虹」や、その作品「わが町」が重要な位置を占めている。

「わが町」の主人公の他吉は、一番見たいと望んだマニラのベングットの世界をプラネタリウムで見ながら息を引き取るのだが、この設定がそのまま『虹の天象儀』に反映されている点は興味深い。『虹の天象儀』は、主人公とタイムスリップしてきたとある青年が未来の「プラネタリウム」（実は、青年が開発をした未来の投影機）を使って、織田作之助に南十字星と「月光の虹」を見せていたとの物語でもある。タイトルの「虹」は日本ではほとんど見るものの不可



大正2年〜平成13年までの年表

- ①「あなたが未来から来たという証拠は？ー鍵を出すー小山、自分の鍵をとり出す。たしかに一致」
- ②「この後、瞬だけ5/25（注：五月二十五日）へ。ここで小山に再会するか？ 鍵は？」
- ③「昭和十八年10月、築地東京劇場の頃、織田作と輪島昭子が出会う頃、戦時中、どんな感じか？ 誰にのりうつる？ 織田

能な「月光の虹」、「天象儀」とは「プラネタリウム」の意味であり、作品の中心的要素が表現されている。

昭和十八年のメモの一枚には、「毎日の女性記者（編集者）芸能・文芸関係？」の記述があり、上部に赤ペンで「昭和十八年ころ女性の記者がいたかどうか調べる」と記されている。クリアーファイルに保存されていた「サンデー毎日」のライターである山内宏泰氏のメールには「1937年以前から記者を続けていた人の名が載っています。井上マツ、柿谷華王子、石川誠子。昭和十八年（1943年）の時点で、少なくともこの人たちは在籍していたことになりま

作にあえない／わが町の公演を見るか？」

④「妻がガイド嬢？」

①過去・現在・未来をつなぐ唯一の物証である東日天文館の「鍵」が、一瞬だけ二個存在するという不思議な設定、②東日天文館が空襲で焼失した直後の昭和二十年五月二十五日へのタイムスリップ、③主人公が「わが町」の舞台上演を見るという構想、④主人公の妻が、タイムスリップした東日天文館のガイド嬢であったという設定など、当初様々な展開が考えられていたことが、これらの資料から伺える。こうした内容に、歴史的事項や当時の時代状況などを絡めて構成を練り上げ、完成に至ったことがわかる。



瀬名秀明氏

■瀬名秀明（せな・ひであき）1968年、静岡県生まれ。作家。薬学博士。東北大学大学院薬学研究科博士課程修了。1995年「パラサイト・イヴ」により第2回日本ホラー小説大賞、1998年「BRAIN VALLEY」により第19回日本SF大賞を受賞。「八月の博物館」、「虹の天象儀」など多くの小説作品のほか、「神」に迫るサイエンス・BRAIN VALLEY 研究序説、「ミトコンドリアのちから」など科学ノンフィクションの著作も多い。仙台市在住。

が主であるが、この十九枚の書き資料は、作品を生み出す上での作家の思考とイマジネーションの軌跡が記されていると同時に、生の息遣いも感じさせる大変興味深いものであるといえよう。

## コラム

### 文学館の小さな住人たち - その2 -

カメに続く「小さな住人」は、このカルガモ。春先になるとどこから飛んできて、文学館の池をすみかとしています。この環境を気に入ってくれているようです。つがいで仲良く泳ぐ姿や、お尻をもちあげてエサを探す様子は、いくら見ても飽きません。翼の下にちらっとのぞく、鮮やかな青色の羽も印象的です。このあたりが暖かくなる頃には、いつの間にか飛び去っていきます。



# 気になる日本語

5

「やさしい」

「やさしい」という言葉が、いまいろんなところで価値判断の決定材料として用いられている。地球にやさしい、環境にやさしい、お肌にやさしい、などなどだ。

これらはみな「やさしい」とひらかなで書き「優しい」とは書かない。「地球に優しい」「環境に優しい」と書くのを見たことがない。

どうしてだろう。

きっと、それは「優しい」と「やさしい」では「やさしい」の方がヤサシク見えるからである。

どうしてそう感じられるか。

「やさしい」を手元の漢和辞典の訓索引で引くと「優」と「易」とふたつの文字がある。方やテンダーであり、方やイージーである。まるきり概念が違う。そのまるきり違う概念が和語にあつてはともに「やさしい」という形容詞になる。ここにややこしい錯覚が生ずる原因がある。共に「やさしい」であるから、イージーであることがテンダーであるかのように、また、テンダーであることがイージーであるかのように感じてしまうのだ。

小学校でまずひらかなを習う。ひ

らかなが読み書きできるようになって漢字を習う。だから漢字よりひらかながイージーで、つまり「優しい」より「やさしい」がヤサシク、やさしいゆえにテンダーであると錯覚してしまうのである。

しかし、ひらかなが漢字よりイージーという意味でやさしいというのは誤解である。ひらかなと漢字は性格が異なる。それだけのことで、どっちがイージーで、どっちがハードかということはない、と思う方が正しい。それは漢字を一切使わないひらかなだけの新聞でも想像してみればいい。読めたものではない。漢字よりひらかながやさしいなら、その新聞の方がやさしく読めるはずだが、実際はまったく逆である。ひらかなだけの文章はやさしいどころか、むしろはるかにムズカシイものになる。

漢字とひらかなはほどよく混じり合っているのが一番読みやすい。ひらかなは一字一字順番に全部読んでいかないと意味がわからない。この作業がたいへん疲れるのである。漢字(熟語)はそうではない。全体を丸ごと見て、一瞬で概念を理解できる。だから疲れない。「仙台文学館」を「仙」台「文」学「館」と一文字ずつ読む人はいないはずで、五文字を一目で、あるいはせいぜい「仙台」「文学館」の二目で読ん

で、読んてというより見て、瞬時に理解、了解しているのである。「せんだいぶんがくかん」ならそうはいかない。そんなわけで「優」と「易」の区別を故意か無意識にか曖昧にした「やさしい」なる日本語は、どうも信頼がお

けない。「〇〇にやさしい」という言い回しに出会うとき、いつもわたしは眉に唾つけることにしている。  
優しいことは、易しいことではない。  
やさしいことは、やさしいことではない。  
(仙台文学館館長)

## 学芸室日記

○12月19日、ライブ文学館「名曲喫茶の時代～小池真理子『無伴奏』」を開催しました。小池さんの代表作のタイトルにもなった〈無伴奏〉は、仙台に実在した伝説の喫茶店です。高校時代そこで詩を書いていたという小池さんと、元店主の木村雅雄さんとは実に40年ぶりの再会。やはりお店の常連だったという当館館長・小池光の3人で、チェンバロとチェロの音色を味わいながら、当時の思い出を振り返りました。

\*トークライブの内容は『小説新潮』2009年3月号に収録されています。



○12月23日、瀬名秀明さんが来館し、新しい常設展示をご覧になりました。ご自身のコーナーでは少し照れくさそうでしたが、展示資料のドラえもんとの久々の再会に、笑顔を見せていました。

○1月10日から2月8日まで開催した「寄贈資料展」。ひときわ目を引いたのが、全長8メートルにも及ぶ「鯉のぼり」。どうやって展示しようか悩み抜き、壁に泳がせました。その大きさに、来館された方は皆一様にびっくりされていました。

